

# 受洗以前の小西氏に関する一試論

岡本 真 (東京大学、日本)

## はじめに

戦国期の日本で受洗したキリシタンたちのなかで、最も著名な一族のひとつが、小西氏である。フランシスコ・ザビエルと知己であり、1565年にガスパル・ヴィレラらが京都を追放された際にはこれに同行し、後には豊臣秀吉に取り立てられた小西立佐や、その子で、バテレン追放令の際には小豆島にオルガンティーノらを匿い、やはり秀吉に取り立てられて肥後半国を統べるまでになった行長のことはよく知られており、豊富な研究の蓄積がある<sup>(1)</sup>。その一方で、この親子以前の小西氏のこと、残された史料の乏しさもあいまって、ほとんど知られていない。すなわち、立佐が堺の出身だったとする点は先行研究の共通した見解だが、葉種商人であったという説や、同時代の他の史料にみられる堺の小西氏と縁者であったかどうかについては賛否両論で<sup>(2)</sup>、定説が示されるには至っていないのである。

そこで、本報告では従来と異なる視角から、立佐以前の小西氏について検討してみたい。その手がかりとなるのは、当時の日本人の改宗状況である。1549年のフランシスコ・ザビエルの来日ののち、コスメ・デ・トルレスやフランシスコ・カブラル、ガスパル・コエリョといった上長や準管区長のもと、数多のイエズス会士が日本での宣教活動に従事したが、その際には、最初に大名をはじめとする支配層の改宗に努め、それをその領内で布教許可や領民への宣教につなげ、全体の改宗を促進していくといった方針がとられた。その成果は、「キリシタン大名」という呼称が今日広く膾炙しているように、少なからぬ大名が改宗した事実にもあらわれている。

だが、すべての日本人キリシタンが、このような布教方針に則して改宗した者であったわけではない。その典型例のひとつが、宣教師と直接にかかわりをもった、日本人貿易商人の改宗である。たとえば、小西氏と姻戚関係を結んだ堺商人の日比屋一族は、日比屋了瑠とその妻子・娘婿らが入信し、イエズス会士たちの活動を扶助したことで著名である<sup>(3)</sup>。その一方で、同一族は16世紀半ばに遣明船貿易や南蛮貿易にかかわった、貿易商人でもあった<sup>(4)</sup>。また、京都商人の五井一族は、イエズス会士やポルトガル商人とつながりを有して受洗してだけでなく、16世紀半ばに遣明船貿易や南蛮貿易にも参加していた<sup>(5)</sup>。そして、博多から長崎に移り、南蛮貿易や朱印船貿易に参加した末次一族も、末次興膳が受洗して博多に教会を建てるなど、やはりイエズス会士たちの活動を支援していた<sup>(6)</sup>。また、詳細は不明だが、中国沿海で貿易をおこなっていた倭寇集団に参加して受洗し、のちにガスパル・ヴィレラの上京に同行した、近江出身のディオゴという者もいた<sup>(7)</sup>。このよう

(1) 池永晃『中世を代表する俊傑小西行長』(福音社書店、1936年)、松田毅一「小西立佐・日比屋了瑠一族に就いて」(『日本歴史』127、1959年)、同「代表的キリシタン伝の補足的な研究」(『近世初期日本関係南蛮史料の研究』風間書房、1967年)、同「小西立佐、行長伝再考」(『京都外国語大学研究論叢』27、1986年)、鳥津亮二『小西行長』(八木書店、2010年)、同「小西立佐と小西行長」(中西裕樹編『高山右近』宮帯出版社、2014年)など。

(2) 同前。

(3) 助野健太郎「堺の切支丹日比屋了慶とその家族」(『日本歴史』59、1953年)、注(1)松田1959年論文、同1967年論文。

(4) 岡本真「堺商人日比屋と16世紀半ばの対外貿易」(中島榮章編『南蛮・紅毛・唐人——16・17世紀の東アジア海域』思文閣出版、2013年)。

(5) 五野井隆史「横瀬浦の開港と焼亡について」(『サピエンチア』47、2013年)、岡本真「戦国期の京都商人と対外貿易——遣明船から南蛮船・朱印船へ——」(『日本史研究』691、2020年)。

(6) 武野要子『藩貿易史の研究』(ミネルヴァ書房、1979年)、永積洋子『朱印船』(吉川弘文館、2001年)、岡美穂子『商人と宣教師——南蛮貿易の世界——』(東京大学出版会、2010年)。Oka Mihoko, “The Nanban and Shuinsen Trade in Sixteenth and Seventeenth-Century Japan”, Manuel Perez Garcia & Lucio De Sousa (eds.), *Global History and New Polycentric Approaches*, Palgrave Macmillan, 2017.

に、イエズス会宣教師の布教初期に彼らとかかわり、受洗した者のなかには、商人が少なからずいたのである。

このような状況を踏まえるならば、前述のように早くから宣教師とかかわりをもっていた小西氏もまた、貿易商人だった可能性があるのではないだろうか。本報告ではこの点について検討することとする。具体的には、まず同時代史料によるキリシタン小西一族、特に立佐と行長の来歴を紹介する。次に遣明船貿易商人小西一族の活動事例を取り上げる。そして最後に、キリシタンである小西一族と遣明船貿易商人であるそれが同一である可能性をさぐることにしたい。

## 1、小西立佐と行長の来歴

小西立佐・行長父子については、前述の通り、豊富な研究の蓄積がある。ここでは、そうした先行研究に依拠しつつ、本報告の所論にかかわる範囲で、彼らの生年や出身地に関する情報を、史料にもとづいて紹介する。

まず立佐については、次に引用する、ルイス・フロイス『日本史』の1593年の記述が注目される。

【史料1】『日本史』第3部第40章<sup>(8)</sup>

このジョウチン立佐は、ガスパル・ヴィレラ師が都地方に行った時以来の、その地における最古の改宗者の一人であり、彼もまた我らのフランシスコ・ザビエル師を識っていた。彼は次男であるアゴスチノ津の守殿という関白殿の絶大な寵臣の父親であるばかりでなく、きわめて思慮に富み、交渉に長けていたので、その人柄は関白殿から大いに愛好され、重んぜられて、彼は関白殿から要職を授けられていた。関白は日本君主国を統治し始めた時から、十八年このかた、彼に室と小豆島の支配を委ねたばかりか、彼の郷里である堺の奉行に起用した。(中略)だが立佐はすでに六十歳を越えた老人であったので、戦争に伴う労苦や激務に堪えることができず、また自宅での安楽と優雅な生活から遠ざかっていることが苦痛であり、名護屋では身体の変調を感じ始め、ついで激しい倦怠感に陥り、徐々に体力を消耗していった。(後略)

これによると、小西立佐は堺の出身で、1593年の時点で60歳過ぎであったと記されているので、生年は1533年以前ということになる。ただし、ペドロ・ゴメスの記した1594年3月15日付書翰には立佐を指して「彼は70歳過ぎであったので」とあり<sup>(9)</sup>、それにしたがえば1523年以前の生まれということになる。

その立佐の、1565年時点の事跡が記されているのが、同じ『日本史』のなかの、次の記述である。

【史料2】『日本史』第1部第67章<sup>(10)</sup>

都のキリシタンは皆彼に付き添ったが、そのうち数名は河内の国まで司祭とともに行くことが決り、次の三名が同行した。その一人は(小西)ジョウチン立佐、他はトマ、三人目はディオゴであった。

これによると、同年にガスパル・ヴィレラらが京都から追放された際に、ヴィレラに同行して河内国に赴いた京都のキリシタン三人のなかに、立佐が含まれていたことがわかる。すなわち、堺出身の立佐は、この時点では京都に移住していたのである。

次に、小西行長について見てみたい。彼について、1584年8月31日付ルイス・フロイス書翰には、「羽柴の海軍の司令官は都生まれのキリシタンで名を(小西)アゴスチノ(行長)といい、教会の親しい友である」とある<sup>(11)</sup>。また、『朝鮮宣祖実録』28年(1595)2月癸丑条には「行長、今年三十八」とあって、彼が1558年生まれであることが知られる。

以上の小西立佐・行長に関する情報を整理すると、彼ら一族は、堺に出自を持ち、立佐は1523年ないし1533年以前に同所で生まれたのち、1558年以前に居所を京都に移し、そこで行長が生まれたことになるのである。

(7) 岡本真「フロイス『日本史』の史料的価値——天文～永禄年間の事例にみる——」(『多元文化』8、2019年)。

(8) 松田毅一・川崎桃太訳『完訳フロイス日本史』3(中央公論新社、2000年)第68章。原書と訳書の章立ての対応関係については、伊川健二「フロイス史料研究事始」(『多元文化』8、2019年)参照。

(9) 松田毅一監訳『十六・七世紀イエズス会日本報告集』第1期第2巻(同朋舎出版、1987年)。

(10) 松田毅一・川崎桃太訳『完訳フロイス日本史』2(中央公論新社、2000年)第25章。

(11) 松田毅一監訳『十六・七世紀イエズス会日本報告集』第3期第6巻(同朋舎出版、1991年)。

## 2、小西一族と遣明船貿易

如上のようなキリシタン小西一族の来歴を踏まえたうえで、貿易とのかかわりで史料上に見いだされる商人小西氏の活動を見てみたい。まず注目されるのが、天文13年(1544)度遣明船にかかわって活動する人物で<sup>(12)</sup>、同5年頃から準備が具体化していたこの遣明船について、小西宗左衛門という人物がかかわっていたことが知られる。すなわち、『天文日記』天文7年正月17日条には、「堺南北十人のきやくしゆ〈渡唐之儀、相催衆也〉より、以木屋宗観并小西宗左衛門、五種五荷到来候」とあって、記主である本願寺10世証如のもとを宗左衛門が木屋宗観とともに訪れ、遣明船の派遣準備への協力について、堺の客衆(遣明船搭乗商人)からの礼物を届けている<sup>(13)</sup>。また、同8年11月13日条・19日条には、紀伊国に停泊していた同船に出来した事件について、客衆から証如への連絡を宗左衛門が仲介していたことも記されている。

この小西宗左衛門について、従来は客衆であったとの見方が一般的だった<sup>(14)</sup>。だが、管見に入った史料から判断する限り、彼はあくまで客衆と証如とのあいだのやりとりの仲介者であり、自らが貿易に直接携わった徴証はない<sup>(15)</sup>。

具体的に遣明船に搭乗したことが知られる小西氏の事例は、この天文13年度遣明船とは別に派遣された、同16年度船において見いだすことができる。それを示すのが、「送日使小西次忠還国図」である<sup>(16)</sup>。これに付された序文によると、同図は、天文16年度遣明船一行が明に渡航し、滞在してから帰国する際、嘉靖29年(1550)5月付で寧波文人たちが小西次忠という者に贈ったものである。その序文では、次忠の人となり称揚されるとともに、「聞有子、名福松者、甚能承父之顔率」とも記されていて、次忠に福松という子がいたこともわかる。

この次忠については、遣明船搭乗者のなかでも上層部にあたる、土官と呼ばれる貿易実務を司る役職にあっていたとする説もある<sup>(17)</sup>。だが、土官を含む天文16年度船搭乗者のおもだった人々が書き留められた記録には、次忠の名が見られない<sup>(18)</sup>。そのため、彼は土官よりもむしろ、同船に搭乗した商人に比定すべきであろう。

彼については、これまであまり注目されてこなかったが、次のような史料もある。

### 【史料3】方仕贈小西次忠詩并序<sup>(19)</sup>

(陸刻長方印、印文「梅屋」)  
(印)

日東小西次忠者、為人忠厚誠確、輕財尚義、故人有識者皆為其有  
徳之士也、來貢

天子、事竣將歸、館人陳懋揚言曰、忠公、實猶吾国之高人也、不可易得耳、

今去、何不為詩、以道其懿、予素与之友、因為一律、以贈、

表貢

華廷振玉珂、

聖明天子錫恩波、存心已見超時類、守己嘗聞出衆多、医可活人伝更遠、財堪

濟世望尤佳、三年竣事思歸国、交誼情分可奈何、

(12) この遣明船については、岡本真「『堺渡唐船』と戦国期の遣明船派遣」(『史学雑誌』124-4、2015年)、同「天文年間の種子島を経由した遣明船」(『日本史研究』638、2015年)を参照。

(13) 以下、『天文日記』は『大系真宗史料』文書記録編8(法蔵館、2015年)による。

(14) 小葉田淳『中世日支通交貿易史の研究』(刀江書院、1941年)260頁。豊田武『堺』(至文堂、1957年)38・39頁など。

(15) 注(12)岡本『史学雑誌』所収論文42頁。

(16) 『国華』37編6冊(通巻439号、1927年)に、図版が掲載されている。

(17) 林基『近世民衆史の史料学』(青木書店、2001年)282頁。

(18) 岡本真・須田牧子「宮内庁書陵部所蔵『策彦周良等往来雜記』」(『東京大学史料編纂所研究紀要』24、2014年)112頁。

(19) 『京都帝国大学国史研究室蔵史料集』(京都帝国大学国史研究室、1928年)に図版が掲載されている。同書では内藤虎次郎所蔵とされているが、彼にかかわるものをおさめた関西大学総合図書館内藤文庫には、この史料の台紙付写真も存在する。なお、翻刻にあたり改行は底本のままとした。

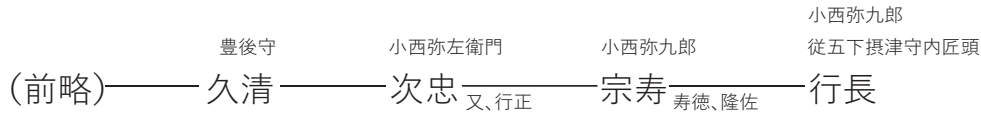
大明嘉靖二十九年庚戌五月吉日雲冠道人方梅厓書 (陽刻正方印,印文「伯行」) (印) (陽刻正方印,印文「宋名臣后」) (印)

これは、やはり小西次忠の帰国にあたり、嘉靖 29 年 (1550) 5 月付で寧波の文人方仕 (号は梅厓) が贈った、送別詩とその序文である。方仕は遣明船搭乗者のなかでも正使など上層部と交流した人物であり<sup>20)</sup>、次忠のような者が彼の揮毫したものを得るのは、容易ではなかったと考えられる。だが、その記載からは、寧波で遣明船一行の滞在した嘉賓館の役人である陳懋と次忠が親しく交わっており、そのよしみにより方仕の一筆を得たという経緯が判明する。前述の「送日使小西次忠還国図」も、おそらく同様の伝手により作製されたものであろう。

これらふたつの史料により、小西次忠という人物が、天文 16 年度船に搭乗していたことが明らかになるのである。

### 3、ある小西氏系図とその当否

この小西次忠と前述の小西立佐・行長とのつながりの有無を考える上で、興味深い系図がある。それは宝賀寿男編『古代氏族系譜集成』(古代氏族研究会、1986 年)に収録されている、小西行長の系図である。同系図には、次のように記されている。



これによると、小西次忠の子は宗寿といい、その別名が寿徳、隆佐である。また、さらにその子が行長である。立佐と隆佐は普通なので、この系図にしたがうと、次忠の子が立佐ということになる<sup>21)</sup>。

前述の「送日使小西次忠還国図」の序文によると、次忠の子は福松である。この「福松」というのは幼名なので、序文が記された 1550 年の時点では、まだ幼かったと考えられる。これに対し、前述のように小西立佐は 1523 年ないし 1533 年以前の生まれである。前者の場合は 1550 年の時点ですでに成人していたであろうが、後者の場合はまだ成人前の可能性もあり、あるいは福松がのちの立佐なのかもしれない。

ただし、小西次忠については、別の所伝もある。それは伊藤長胤『盃簪録』に記された、兵庫の商人小西彦兵衛の先祖に関するものである<sup>22)</sup>。それによると、彦兵衛の先祖は次忠、号は久清といい、明に渡航して皇帝の覚えがめでたく、その帰国に際して、皇帝は絵師に命じて「次忠并子福松供奉図」二幅を描かせ、一幅は皇帝のもとにとどめ、一幅は次忠に賜ったとのことである。福松の名は「送日使小西次忠還国図」の序文と共通するし、久清という名は、前掲の系図では次忠の父として記されている。

仮にこの小西彦兵衛家の所伝の通り、同家の祖先が次忠なのであれば、系図が誤りということになる。というのも、立佐は前述のように堺で生まれ、のちに京都に移っており、兵庫商人ではないからである<sup>23)</sup>。ただし、皇帝に関する言説は多分に創作の色彩が濃いもので事実とは考えられず、その記述の信憑性に全幅の信頼がおけるわけではない。現状では、次忠と立佐が親子である可能性とそうでない可能性の、両様を想定する必要があるだろう。

20) 方仕については米谷均「中世日明関係における送別詩文の虚々実々——死せる寧波文人、生ける遣明使団員をねぎらう——」(『北大史学』55、2015 年)に詳しい。

21) ただし、管見の限り、行長の父を寿徳としているのは、いずれも後世の軍記物等であり、松田毅一氏は建部寿徳との混同の可能性を指摘している(注①松田 1967 年論文 763 頁)。

22) 『随筆百花苑』6 (中央公論社、1983 年)。注①林書 282・283 頁。

23) 江口良橘「福原びんかがみと兵庫人伝稿」(『神戸史談』230、1972 年)によると、小西彦兵衛の祖先は、遅くとも慶長年間には兵庫にいたとのことである。そうであるならば、同じ頃に肥後八代を統治しており、のちに没落した小西行長の系統とは直接にかかわらないことになる。

## おわりに

本報告では、キリシタンの小西一族と貿易商人のそれが同族である可能性について検討した。仮に同族であるならば、注目すべき事柄がひとつある。それは、前掲の史料3に「医可活人伝更遠」という一節があるように、次忠が医薬にかかわる人物であった点である<sup>24)</sup>。これは、小西立佐・行長一族がもともと薬種商であったかどうかという、先行研究の議論にもつながるものである<sup>25)</sup>。

ただし、現時点では、信頼し得る論拠が不足しており、キリシタンの小西一族がもともと貿易商人であった可能性のあることを、指摘するにとどまらざるを得ない。特に系図については、その根拠をさぐることをはじめ、さらなる検討が必要である。あげて今後の課題としたい。

---

<sup>24)</sup> 「送日使小西次忠還国図」の序文にも「以医活人」との一説がある。

<sup>25)</sup> 注(1)松田1967年論文767～772頁。